

自己評価報告書(最終報告)

コース等名

教員養成特別コース

記載責任者

木下 光二

■平成24年度の目標に対する自己点検・評価

Ⅰ. 学長の定める重点目標

Ⅰ-1. 教員養成の質保証

大学の機能別分化・機能強化が求められる中、本学は教員養成大学として高度専門職業人としての教員を養成することを目標としている。教員養成の質保証のため、専攻・コースではどのような取り組みを行うか、具体的な方策を示してほしい。

1. 目標・計画

本専攻・本コースは、理論と実践の融合化を図るため、鳴門市内の小学校を実習校とし、P1が9月以降半年間、P2が4月以降1年間という長期にわたる教員としての資質向上に努めている。実習の中で毎月1.2回は研究授業を実施し、教材研究、指導案の作成、授業の省察や分析までゼミ担当と一緒に実施しており、実習そのものが教員としての力量形成に合致するものである。

また、本年度は、更に実践力をつけるため、「わかる授業」から「できる授業」への転換を図り、学生のより確かな実践力の育成をめざす。具体的には、大学における教科教育実践A・Bや教科指導の基礎的理解と実践、学級・学校経営の基礎的理解と実践等の授業における模擬授業や模擬経営の実施において、長所を伸ばすことはもとより、学生の力量が不足している場面(部分)の指導を定着するまで繰り返し実施することで、苦手意識を克服し、自信をもって授業に当たれるようにし、教員としての力量形成や質保障に努める。

2. 点検・評価

本専攻・本コースは、本年度も理論と実践の融合し、学生の質向上を図るための実践の場を鳴門市内の小学校を実習校とし、1年生11名が9月以降半年間、2年生6名が4月以降1年間という長期にわたって教員の力量形成に努め、その成果を2月10日の最終成果報告会で発表した。学生による個人差はあるものの、小学校の厳しい教育現場で実践力を高め、実習校の校長先生や実習担当の先生から実習の成果を認める高い評価を得ることが出来た。

また、本年度は、更に実践力をつけるため、「わかる授業」から「できる授業」への転換を図り、学生のより確かな実践力の育成をめざした。具体的には、大学における教科教育実践A・Bや教科指導の基礎的理解と実践、学級・学校経営の基礎的理解と実践等の授業を関連づけることはもとより、模擬授業や模擬経営の実践演習を多く取り入れ、学生の力量形成に努めた。学生の実践力を評価するためのコース独自の授業実践力や生徒指導力のスタンダード表も作成し、教員としての力量形成や質保障に努めた。

Ⅱ. 分野別

Ⅱ-1. 教育・学生生活支援

1. 目標・計画

22年度より、教職大学院のカリキュラムを変更し、より、院生の個々のニーズに対応できる形とした。附属小学校の力量のある教員の授業参観(教科教育実践AB)やその振り返り等、学生にはとても好評である。その効果を検証し、さらに改善を進める。また、採用試験対策として、コースとして、週2回程度、面接や集団討論などの対策の強化を図るように努める。

2. 点検・評価

平成23年度は、教員養成特別コースの院生室に小学校全教科の教科書と指導書をコース経費で購入し、いつでも閲覧できる環境を整備した。更に今年度は平成25年度から新しく開設する中学校教員養成のため、中学校の教科書や指導書も購入した。

授業においては、「教科等指導の基礎的理解と実践」において教職大学院の現職コースの先生方と一緒に学べるようにし、実践に基づく率直な意見を聞いたことは、学生にとって授業作りのヒントや励みになったようだ。更には、構想発表会や中間発表会、最終成果報告会を、6年一貫コースである学校教育実践コースの学部生にも公開したことは、学生同士のつながりにも効果的であった。

本年度も学部と大学院ともにメーリングリストを作成し運用した。学生の授業記録や実習記録はもとより、作成した指導案や教材等を全員が共有でき、教員が即時的に助言や指導ができたことは、学生の指導には効果的であった。また、本コー

Ⅱ-2. 研究

1. 目標・計画

それぞれが独自に研究を進めるとともに、教職大学院における学卒者のカリキュラムの有り様について、コース全体で研究を進める。

2. 点検・評価

それぞれが独自に研究を進めるとともに、教職大学院におけるカリキュラムの有り様についてコース全体で研究を進め、より実践的な授業や演習が行えるように工夫した。学部「学校教育実践コース」の運営においても、より実践的に学べるよう、大学院教員養成特別コースとの合同授業や合同の演習を行えるようにした。また、学校教育実践コースのカリキュラムの改善に着手し、連動する大学院教員養成特別コースのカリキュラムの検討改善に努めた。

Ⅱ-3. 大学運営

1. 目標・計画

各自、委員として、学内の各種会議に出席し、職務を遂行する。特にH23年度は、教員養成特別コースと接続する6年一貫を見越した学部新コース「学校教育実践コース」が始まったので、所属する学部生と意思の疎通を図りながら、6年一貫コースにふさわしい人材の育成中である。

2. 点検・評価

各自、委員として、学内の各種会議に出席し、職務を遂行した。特に本年度は、教員養成特別コースと接続する「学校教育実践コース」も2年目となり、学部生が学部、大学院の両方を視野に入れ、より高い意識で教職をめざせるような授業や演習に取組み、一貫教育の有り様について改善を重ねることで、大学運営に貢献できたと考える。

Ⅱ-4. 附属学校・社会との連携、国際交流等

1. 目標・計画

本コースは教育支援講師・アドバイザー制度による講師派遣の件数が多い。24年度も継続し、地域の学校への支援を進める。附属幼稚園や附属小学校とも連携を進めており、附属幼稚園ではコース教員の2名が、研究協力者となり、定期的に幼稚園を訪ねて合同研究を行っている。また、附属小学校とは、コース教員の2名が、図工科と生活科の研究協力者となり、授業研究会に講師として参加するなどして、共同研究を行っている。

2. 点検・評価

附属幼稚園や附属小学校との連携強化に努めた。附属幼稚園ではコース教員の2名が、研究協力者となり、定期的に幼稚園を訪ねて合同研究を行ったり、文部科学省研究委嘱である幼小接続の教育課程開発研究を合同で行ったりした。教員2名のうち1名は、附属幼稚園運営指導委員会の委員長を務めた(25年度も継続)。附属小学校とは、コース教員の2名が、生活科と理科の研究協力者となり、授業研究会や研究発表会に講師として参加するなどして共同研究を行い、連携を図った。

Ⅲ. 本学への総合的貢献(特記事項)

上述したことはあるが、H24年度は、教員養成特別コースと接続する6年一貫を見越した学部新コース「学校教育実践コース」の運用が2年目となった。4+ α 年の教員養成が制度化されない段階で、先導的に取り組む本学の姿を社会を示すのに、本コースは寄与している。また、本コースが鳴門市内小学校で実施している実習を通して、鳴門市の小学校や鳴門市教育委員会との連携を深め、本学に貢献していると考えられる。